

論 説

ニューレフト時代のテイラーの 理論と政治活動 1956-1960(1)

梅 川 佳 子

目次

はじめに

第1節 テイラーによる理論誌の創設と核兵器廃絶運動

- (1) テイラーによる『ユニヴァーシティーズ・アンド・レフト・レビュー』の創設
- (2) ニューレフト
- (3) テイラーの核廃絶運動

第2節 テイラーと初期マルクス

- (1) 疎外
- (2) 初期マルクス（以上、本号掲載）

第3節 テイラーのソーシャリズム

- (1) 定義
- (2) 疎外克服としてのソーシャリズム
- (3) 社会連帯としてのソーシャリズム
私企業の方と人民の方
連帯としてのソーシャリズム

第4節 コミュニズム批判

- (1) テイラーとトムスンの関係
- (2) テイラーのコミュニズム批判
- (3) トムスンの反発

おわりに

はじめに

本稿の目的と意義

筆者は、これまでに論文「チャールズ・テイラーとハンガリー事件(1956-1957)」を執筆し、名古屋大学法政論集の第257号および259号に連載で掲載した。この論文の中で筆者は、テイラーの政治活動の出発点となった、1956年のハンガリー難民支援に焦点を置き、彼の政治哲学の源泉に強烈なヒューマニズムがあったことを明らかにした。ハンガリー事件が起きた1956年10月当時、オックスフォード大学のフェローであったテイラーは、フェローを休職し、1956年11月から1957年春まで、オーストリアで難民の支援活動に奔走した。また、彼は、そのような難民を生み出す原因となったスターリニズムに対する厳しい批判意識を持っていた。

本稿は、彼がオーストリアでの難民支援活動を終えてイギリスに戻った後、ニューレフト運動に関わる中で、彼のスターリニズム批判が、どのように継承され、発展していったのかについての検討を行うことを目的としている。

スターリニズム下での疎外克服の関心は、ハンガリー事件のころからある。従ってその後のテイラーのソーシャリズムは、従来の共産党の革命による社会主義社会の方向とは違うものになる。テイラーは、ニューレフト時代に、初期マルクスの影響を受けながら、民主主義の拡充によるソーシャリズムの方向を模索する。彼は、「疎外」の問題を資本主義と社会主義の両方を含んだ産業主義の問題として、理論的に考える。そこで疎外克服と社会連帯の2つの要素から成るソーシャリズムのあり方を探求していく。

このように青年期のテイラーは、疎外や資本主義の問題に強い関心を寄せていたが、こうした傾向は、現在のテイラーの思想にも継承されている。例えば彼は、2008年(77歳)に稲盛財団から第24回京都賞(思想・芸術部門)を受賞しているが、その受賞に際してのインタビューにおいて、経済などの要因による疎外に関する問題について、以下のように語っている。

〔科学と技術の進歩した資本主義あるいは社会主義では〕生産に重点が置かれており、このことの副作用は破滅的 (catastrophic) であろう。したがって、一般的にわれわれの社会においては、われわれが行っていることについての「思慮深さ」(mindfulness) が欠如している¹⁾。〔 〕は筆者の挿入。以下同様。

テイラーは、科学技術や資本主義がもたらす「副作用」に対して懸念を示しており、「思慮深さ」を向上させる必要があると考えている。このような関心は彼の仕事に一貫して見られるのだが、とくに彼の『〈ほんもの〉という倫理』(1991年・60歳)においても、資本主義社会のもたらす負の要素に関して、警鐘を鳴らしている。すなわち彼は、個人の「自由」が、「乱暴な資本主義 (wild capitalism) がつくりだす競争のジャングル」の中を、しかも「不平等と搾取が野放しになっている」中を、「どれだけ生きながらえられるか疑わしい」と述べている²⁾。また、「市場と官僚制国家」が一体となって活動する場合、「アトミズムと道具主義」へと向かっていく流れが強められ、「断片化」と「疎外」が生み出されていくと述べている³⁾。

こうした不平等や疎外に関するテイラーの問題意識は、他の諸著作にもあらわれてくるのだが、たとえば、彼が1970年(39歳)に出版した『政治の形態』*The Pattern of Politics* においても、見出すことができる。本書においてテイラーは、当時のカナダにおける進歩保守党と自由党の二大政党が、ともに資本主義的な体制を維持する政党であると批判する。テイラーにとって、当時の資本主義社会は、大企業の利益を追求する効率性優先の社会であり「パブリックな観点」や「公的ニーズ」が犠牲にされ、人々は政治的にも経済的にも疎外されていた⁴⁾。

本稿は、以上のようなテイラーによる資本主義批判や疎外論の源流をさぐることにもなる。彼は、カナダのマギル大学を卒業し、イギリスの

1) http://www.youtube.com/watch?v=m_MWTHDJ12w (2009年11月2日閲覧)
2) Charles Taylor, *The Ethics of Authenticity*, Harvard University Press, 2003, p.101; 田中智彦訳『〈ほんもの〉という倫理』産業図書株式会社、2004年、150頁。
3) *Ibid.*, pp.111-112, 117-119; 田中智彦訳、152-153、160-161頁。
4) Charles Taylor, *The Pattern of Politics*, McClelland and Stewart, 1970, pp.1-14, 29-32, 41-47.

論 説

オックスフォード大学に留学するが、同大学のフェローであった1956年（25歳）からニューレフトの理論活動を開始している。テイラーはニューレフトとして市場社会に対して批判的な傾向を確立した。この傾向が、上にのべたように、その後も継承されている可能性、あるいは変容しながら、別の形で維持される可能性もあるだろう。

ところが、これまでの先行研究では、むしろ逆の評価がなされている。例えば、I・M・ヤング Iris Marion Young は、テイラーにおけるアイデンティティの「承認」の議論が、「不平等や抑圧」といった問題を軽視していると批判する⁵⁾。ブライアン・バリー Brian Barry も、テイラーは「社会の悲惨さ (misery) の深い根源については沈黙している」⁶⁾と指摘している。

このような先行研究は、実は、主にはテイラーの1980年代以降（＝円熟期）の著作を対象にしている。たしかに、円熟期の著作を中心に読むと、ヤングやバリーも指摘するように、疎外や不平等といった問題が、前面に強く押し出されているわけではない。もちろん筆者が前に引用したような側面はあるのだが、この側面が、一見してわかるような目立ったかたちで、主要な論調として出てくるわけではない。

ところが、本論文で明らかにするように、テイラーの青年期の著作においては、疎外や不平等といった問題が、彼の重要なテーマの1つとして繰り返し論じられている。だから、青年期におけるテイラーの疎外概念や資本主義批判を理解することは、彼の円熟期の著作を読む場合にも、新たな読み方を提供する1つの素材になると思われる。

青年期テイラーの思想における、疎外や不平等といった観点の存在については、これまでのテイラー研究においても簡単に言及されてきた。テイラーの疎外論は、その源泉の1つを、マルクスの思想に持っていたが、テイラーの哲学における「マルクス主義」の存在を指摘した最も顕著な思想家の1人は、アイザイア・バーリン Isaiah Berlin である。バーリンは1994年に、テイラーの研究を包括的に評価した1冊の本に序文を書いた。そこでバーリンは、テイラーが「マルクス主義者の考え方 (Marxist ideas) に影響を受けてきた」点を強調した。バーリンによれば、

5) Iris Marion Young, *Inclusion and Democracy*, Oxford University Press, 2000, p.105.

6) Brian Barry, *Culture & Equality*, Polity Press, 2007, p.63.

テイラーは、現代資本主義に由来する「抑圧と搾取と支配」から社会が「解放」されて初めて、人間の繁栄が可能であると考えていた⁷⁾。

テイラー研究者の1人であるイアン・フレイザー Ian Fraser も、テイラーは、マルクス主義に「共感をいだいて」おり「イギリスにおけるニューレフトの創設者の1人であり、より人間らしい社会に関する現代の議論に対するマルクス主義の継続的な有効性を再検討し再評価するという旅を始めた⁸⁾」と述べている。フレイザーは「旅を始めた」ということによって、マルクス主義に共感していたテイラーの青年期と円熟期の関連を示唆している。菊池理夫は、テイラーが「若い頃はニューレフトの立場を取った」ことについて触れている。高田宏史も、円熟期である「のちのテイラーの政治哲学……にも通じる点が」、「『社会主義的ヒューマニズム』を提唱する」若きテイラーに「いくつか存在する」⁹⁾と述べている。したがって、円熟期のテイラーの著作を読み直すためにも、青年テイラーの一面を明らかにすることには、意味があると思われる。

もっとも、本稿で論じる青年テイラーの性格は、彼の青年時代においても、重要ではあるが彼の一面にすぎない。同時代において、彼には、他の言語学や哲学の論文や著作があり、これらの作品はマルクスと直接的に関係をもっているとはいえない。特に1964年に出版される彼の最初の単著である『行動の説明』*Explanation of Behaviour*¹⁰⁾に集約されてくる一連の諸論文では、人間の行動はどのようにして説明されるのか、さらに、その行動は言語をどのように使用することによって説明されるのか、などについて、きわめて緻密で詳細な考察が続いている¹¹⁾。この

7) Isaiah Berlin, "Introduction", James Tully (ed.), *Philosophy in an Age of Pluralism: The Philosophy of Charles Taylor in Question*, Cambridge University Press, 1994, p.2.

8) Ian Fraser, *Dialectics of the Self: Transcending Charles Taylor*, Imprint Academic, 2007, p.2. ニコラス・H・スミス Nicholas H. Smith もまた、テイラーの1950年代から1960年代の著作について簡単にふれながら、テイラーの議論における「社会批判」(social criticism)に注意を払っている(Nicholas H. Smith, *Charles Taylor: Meaning, Morals and Modernity*, Polity Press, 2002, pp.172-180.)。

9) 菊池理夫『現代のコミュニタリアニズムと「第三の道」』風行社、2005年、110頁。高田宏史「テイラー——コミュニタリアニズムと多元主義の『あいだ』」齋藤純一編著『政治哲学5——理性の両義性』岩波書店、2014年、206頁。

10) Charles Taylor, *Explanation of Behaviour*, Routledge and Kegan Paul, 1964.

11) 例えば以下の諸論文がある。Charles Taylor, "Can Political Philosophy be Neutral?", *Universities & Left Review*, Spring 1957, Vol.1, No.1; Charles Taylor, and Michael Kullman, "The Pre-Objective World", *The Review of Metaphysics*, No. 1, Sep., 1958; Charles Taylor and A. J. Ayer, "Phenomenology and Linguistic Analysis",

考察の中には、当時のニューレフトの理論家であるエドワード・トムスン Edward Thompson や、テイラーがニューレフトの中に持ち込んだマルクスの影響は発見できない。したがって青年テイラーを総合的に理解するためには、第1に彼のニューレフトとしての性格を知ると同時に、第2に、それとは別の、人間の行動に関する哲学者としての性格の両面を見る必要がある。

本稿で扱うのは、第1のニューレフトとしての性格である。第2の哲学者テイラーについて、さらに第1と第2の性格を総合した場合のテイラーの理解については、筆者は別稿を予定しており、本稿は、そのための基礎作業である。

本稿の概要

本稿の構成は(1)と(2・完)の2本による。ここでは(1)と(2・完)をあわせた本稿の全体の概要について述べる。

本稿は、テイラーのニューレフトとしての側面を明らかにするために、次の4点について述べる。第1に、テイラーがイギリスのニューレフトに対してどのような影響を与え、理論誌『ユニヴァーシティーズ・アンド・レフト・レビュー』*Universities & Left Review* (以下、ULR誌と略記)の創設においていかなる役割を果たしたのか、さらに核兵器廃絶運動にどのように関わったのかについて述べる(第1節)。第2に、テイラーが初期マルクスから継承した内容を明らかにする(第2節)。第3に、彼が、初期マルクスの影響を受けながら形成した「ソシアリズム」とはどのような内容を有していたのかを考察する(第3節)。第4に、テイラーが、彼の「ソシアリズム」の立場から、いかに Kommunismus を批判したのか、この点を論じる(第4節)。その際、ニューレフトの指導者の1人であったエドワード・トムスンとの違いも述べることにする。

以上の4点が本稿全体の内容である。そこで、本稿(1)においては、これまで述べた内容のうち、第1と第2について述べる。つまり、ニューレフトに対するテイラーの影響について述べた上で、彼が初期マルクスから何を継承したのかを検討する。

Proceedings of the Aristotelian Society, 33, Supplementary, 1959; Charles Taylor, "Ontology", *Philosophy*, Vol.34, No.129, April 1959.

第1節 テイラーによる理論誌の創設と核兵器廃絶運動

(1) テイラーによる『ユニヴァーシティーズ・アンド・レフト・レビュー』の創設

チャールズ・テイラーは、スチュアート・ホール Stuart Hall らとともに、1956年の夏に、*ULR* 誌を創刊するための準備を終了していた。同時に、この夏に、テイラーは、メルロ・ポンティと研究するためにパリを訪問している¹²⁾。

しかし、テイラーらが *ULR* 誌創刊を決めた2か月後に、ハンガリー動乱が起きる。そこでテイラーは、前に述べたように、1956年11月から1957年4月まで、オーストリアに行き、ハンガリー学生難民支援を行い、世界大学支援機構の代表を務める。したがって *ULR* 誌の創刊号の出版は、テイラーがフランスとオーストリアから帰国するまで遅れこむ。創刊号は1957年の春号として出版されている¹³⁾。創刊号の編者は、テイラー (27歳)、ホール (25歳)、ゲイブリエル・ピアスン Gabriel Pearson (24歳)、ラファエル・サミュエル Raphael Samuel (22歳) の4人である¹⁴⁾。

テイラーとホールは、共産党とは関係を持たない「独立派」を代表しており、テイラーは、「カソリック・マルクス主義者」(Catholic Marxist) という評判であった。サミュエルとピアスンは、ハンガリー事件までは共産党員であったが、この事件後に離党している¹⁵⁾。

12) Fred Inglis, *Raymond Williams*, Routledge, 1995, p.154.

13) Marc Caldwell, "Charles Taylor and the Pre-history of British Cultural Studies", *Critical Arts: A South-North Journal of Cultural & Media Studies*, 23 (3) 2009, p.350; *Universities & Left Review*, Spring 1957 Vol.1 No.1. テイラーは、*ULR* 誌の創刊のための資金についても重要な役割を果たし、自己の資金を投入した。彼の資金は、カナダ議会上院議員であった彼の祖父から相続したものであったという (Fred Inglis, *op.cit.*, p.184.)。

14) Charles Taylor et.al., "Editorial", *Universities & Left Review*, Spring 1957, Vol.1 No.1, p.1.

15) Stuart Hall, "The 'First' New Left: Life and Times" in Robin Archer, Diemut Bubeck, Hanjo Glock, Lesley Jacobs, Seth Moglen, Adam Steinhouse, Daniel Weinstock (eds), *Out of Apathy: Voices of the New Left Thirty Years On: Papers Based on a Conference Organized by the Oxford University Socialist Discussion Group*, Verso, 1989, pp.19-20; Stuart Hall, "Life and Times of The First New Left", *New Left Review* 61, Jan-Feb 2010, pp.177-196.

論 説

ULR 誌という名称は、『左翼評論』 *Left Review* という 1930 年代における最も成功したラディカルな知的雑誌からとられており、そのラディカリズムを復活させようとしていた¹⁶⁾。

テイラーは ULR 誌の創設において「最も影響力をもっていた」が、この点について、ホールは次のように述べている。

重要な編者の 1 人として、テイラーは、ULR 誌の創設において最も影響力をもち、その雑誌の初期の政治、およびある程度その雑誌の理論的および哲学的立場において、最も重要であった。テイラーは、その他の者たちよりも、哲学的にずっと洗練されており、彼の政治〔ULR 誌を含む政治活動〕とはほとんど関係のないオックスフォードの哲学的議論における地位もあわせ持っていた¹⁷⁾。

テイラーは ULR 誌の関係者に対して、個人的にも大きな影響を与えた。1951 年に「ローズ奨学生」としてジャマイカの学校からオックスフォードに来ていたホール¹⁸⁾ に対して、テイラーが持っていた影響力について、フレッド・イングリス Fred Inglis は以下のように述べている。

ホールは、・・・非常に背が高く彫りが深く、友好的でおどけたチャールズ・テイラーと呼ばれるカナダのキリスト教マルクス主義者 (Canadian Christian-Marxist) と友人になった。・・・テイラーはいつも、硬直化したマルクス主義者を強く批判し、スチュアート・ホールに、マルクスのヒューマニストの側面を教え、またヘーゲル

16) Dennis Dworkin, *Cultural Marxism in Postwar Britain: History, the New Left, and the Origins of Cultural Studies*, Duke University Press, 1997, p.56.

17) Stuart Hall, "Charles Taylor in the Archives", *Critical Arts: South-North Cultural and Media Studies*, Volume 23, Issue 3, 2009, p.375.

18) ホールは、当時を振りかえって、彼自身が「ジャマイカの独立と反帝国主義への熱心な関心」をもつ、「反植民主義の学生」であったと述べている (COLIN MacCABE, "An Interview with Stuart Hall," *Critical Quarterly*, December 2007, pp.13-14.)。ホールは左翼に共感的であったが、「オーソドックスなマルクス主義」が「人種や民族性といった第三世界の問題」や、学部生のときに彼が知的に関心を抱いた「人種差別主義や文学や文化の問題」を「十分には扱うことができていない」ということに問題を感じていた (Stuart Hall, "The 'First' New Left: Life and Times", p.15.)。

についても教えた¹⁹⁾。

ホール自身、テイラーが、ホールにとって「個人的にも、非常に重要であった」と述べている。ホールは、「マルクスの1844年の経哲草稿についての最初の議論を覚えて」²⁰⁾おり、以下のように述べている。

私たちは皆、マルクス主義を、固定され完成された教義や神聖なテキストとして見なすことを拒否した。たとえば、私たちにとってかなりの重要性をもっていたのが、チャック・テイラー〔チャールズ・テイラー〕を通じた、マルクスの初期の経済学・哲学草稿の再発見であった。その草稿のテーマは、疎外、類的存在と新たなニーズであった。その草稿は、テイラーがフランスから持ってきて、その少し後に英訳版を用いることができるようになった²¹⁾。

ラファエル・サミュエルも、テイラーが持ち込んだ初期マルクスの影響について次のように語っている。

疎外理論と若きマルクスは、私たちに、後期の「決定主義者」マルクスと対照的な、「ヒューマニスト」のマルクス——1844年の『経

19) Fred Inglis, *op.cit.*, p.154. テイラーによれば、「修正主義者と呼ばれた人たち——主に西欧のマルクス主義者たち」、さらにたとえばユーゴスラヴィアのような場所における別のマルクス主義者たちもまた、「人間主義的マルクス主義 (humanist Marxism) の基礎を再発見する試み」を続けていた (Charles Taylor, "Marxist Philosophy", *Men of Ideas: Some Creators of Contemporary Philosophy*, British Broadcasting Corporation, 1978, p.57; 磯野友彦監訳「マルクス主義哲学」『哲学の現在——世界の思想家十五人との対話』河出書房新社、1983年、67頁)。

20) Kuan-Hsing Chen, "The Formation of a Diasporic Intellectual: an Interview with Stuart Hall" in David Morley and Kuan-Hsing Chen (eds), *Critical Dialogues in Cultural Studies*, Routledge, 1997, p.497.

21) Stuart Hall, "The 'First' New Left: Life and Times", p.27. テイラーは、パリからフランス語版の『経哲草稿』をイギリスに持ち帰った。テイラーは、後の1966年の論文「マルクス主義と経験主義」において、なぜマルクス主義とマルクス主義者の伝統が、イギリスとイギリス哲学に対してほとんどインパクトを与えてこなかったのか、という点を検討している。彼は、イギリスにおける経験主義的発想と、マルクス主義の思考法の違いについて述べ、マルクス主義がイギリスの学問に「帰化すること」(naturalization)が困難であったと指摘している (Charles Taylor, "Marxism and Empiricism" in Bernard Williams and Alan Montefiore (eds), *British Analytical Philosophy: International Library of Philosophy and Scientific Method*, Routledge & Kegan Pau, 1966.)

哲草稿』のマルクス——を発見させた。この初期マルクスは、『経哲草稿』が1960年にはじめて英訳されるまでは、ある意味で、イギリスに関する限り、私たちだけのものであった²²⁾。

テイラーによるマルクスの『経哲草稿』の持ち込みを1つの契機として、ニューレフトは、若きマルクスの取り組んだ主題に惹かれた。その1つのテーマが「疎外」であった。サミュエルによれば、疎外は、彼らの議論に新たな尊厳と進歩を与え、資本主義に対する彼らの批判を強める統合的概念を与えた。さらにサミュエルは、彼らが「疎外」の中に、「イギリス社会で自分達が『アウトサイダー』であると感じていた人々に語りかける言葉を発見した」と述べている²³⁾。つまりULR誌の論客たちは、「疎外」というキー概念を「賃金奴隷」の成立条件という初期の限定から解き放って拡大してみると、それがイギリス社会の「アウトサイダー」（階級であれ、民族・人種であれ、文化であれ、どのカテゴリーに分かれるにしても）にも当てはまる概念であることに気づいたのである²⁴⁾。

さらにサミュエルは、当時、「疎外」概念が急速に浮上し、初期の社会主義的思想家たちが「搾取」概念によって、また、ずっと最近では「ヘゲモニー」概念によって喚起されたのと同様の想像力を「疎外」概念が喚起したことを回想している²⁵⁾。ホールもまた、ULR誌に対するテイラーの影響の内容について次のように述べている。

ULR誌の「伝統」に対するテイラーの影響は、・・・一種のソーシャリスト・ヒューマンイズムの採用、スターリニズム批判、マルクスにおけるヘーゲル主義者の伝統の復活、とりわけ、当時再発見された『経哲草稿』における「疎外」、経済主義に対する批判、

22) Raphael Samuel, "Born-again Socialism" in Robin Archer, Diemut Bubeck, Hanjo Glock, Lesley Jacobs, Seth Moglen, Adam Steinhouse, Daniel Weinstock (eds), *Out of Apathy: Voices of the New Left Thirty Years On: Papers Based on a Conference Organized by the Oxford University Socialist Discussion Group*, Verso, 1989, p.43.

23) Raphael Samuel, op.cit., p.43.

24) Lin Chun, *The British New Left*, Edinburgh University, 1993, p.34; 渡辺雅男訳『イギリスのニューレフト——カルチュラル・スタディーズの源流』彩流社、1999年、80頁。

25) *Ibid*; Raphael Samuel, op.cit., p.43.

イギリスの哲学的経験主義に対する批判、および大陸の「形而上学」(メルロ・ポンティ、そしてヘーゲル!)に対するイギリスの哲学的経験主義の疑いに対する批判、社会科学における実証主義に対する批判などである²⁶⁾。

ホールは、上のようなテイラーの立場は *ULR* 誌の「立場」だったと述べている。テイラーは、「*ULR* 誌を立ち上げることによって、そしてニューレフトの政治を定義することによって必要とされる、より実践的で政治的な仕事を共有した」。したがってテイラーは「この種の一般的な環境と知的な力を形成する際に、強力な力であった」とされている。ホールは、自らが「おそらく彼 [テイラー] に個人的に最も近かった」と述べながらも、ホールのみならず「私たちは皆、彼から学び、彼を非常に尊敬していた」と述べている²⁷⁾。

(2) ニューレフト

これまで、テイラーが *ULR* 誌の創刊に関与したことについて述べてきた。次に、テイラー周辺的环境について説明しておく。この時期のテイラーの思想は、当時の時代状況を背景としながら、ニューレフト運動に関わった多くの人々との関係において形成されたものであるからである。テイラーの政治哲学に対する理解を深めるために、その背景と彼の活動について明らかにしたい。

そこで、第1に、当時のニューレフトの問題関心について、第2に、ニューレフトを形成した2つの異なるグループについて、第3に、2つのグループの差異と共通点について、第4に、テイラーのカナダへの帰国について、述べることにする。

第1に、テイラーが *ULR* 誌を創刊するころの、彼らの問題関心であるが、それは、直接的にはスターリニズムによるハンガリー弾圧とイギ

26) Stuart Hall, "Charles Taylor in the Archives", p.375. テイラーは後に、マルクスとフォイエルバッハの関係についても述べている (Charles Taylor, "Feuerbach and Roots of Materialism", *Political Studies*, Vol.26, No.3, 1978)。

27) Stuart Hall, op. cit., p.375.

論 説

リス軍とフランス軍によるスエズ侵攻であった。スチュアート・ホールは、この2つの出来事は、当時政治的生活を支配していた2つのシステム——スターリニズムと西洋帝国主義——に隠れていた暴力性と攻撃性を暴き、政治的世界にショックの波を送ったと論じている²⁸⁾。ホールは、*ULR* 誌を創刊した当時の状況について、次のように振り返る。

スエズ危機とハンガリー事件は・・・ニューレフトの形成にとって非常に重要な瞬間であった。1つは、誰もが言っていたこととは異なって、帝国主義が死んでいなかったということであった。・・・もう1つは、ハンガリー事件が、ソ連のシステムの完全な墮落を示したということである。・・・ニューレフトは資本主義に批判的であるが、 Kommunismus を代替案として考えない。したがって、ニューレフトは、〔資本主義でもなく Kommunismus でもなく〕その中間的な場所にいる²⁹⁾。

ここでホールが述べているように、1956年に、まさに、ハンガリー事件とスエズ危機という2つの事件への反動として活動をおこしたが、ニューレフトであった。

第2に、ニューレフトは異なる2つの伝統を統合したものである。それは、2つの政治的経験、つまり2つの「世代」を統合したものを代表していた。最初は、元共産党員を中心とした「コミュニスト・ヒューマニズム」の伝統である。この伝統は、雑誌『ニュー・リーズナー』*The New Reasoner* (以下 *NR* 誌と略記) とその創設者たちによって維持されていた。すなわちエドワード・トムスン (リーズ大学講師)、ジョン・サヴィル John Saville (ハル大学講師) らに象徴されるところの *NR* 誌グループである。

次は、「独立派ソーシャリスト」(independent socialist) の伝統を引く者たちである。このグループの多くの人々はマルクス主義に影響を受け、他の何人かは、一時期はコミュニストであった。それにもかかわらず、大多数は、「政党」への加入からの距離を維持する1950年代の左派学生

28) Stuart Hall, "The 'First' New: Life and Times", p.177.

29) COLIN MacCABE, op.cit., p.19.

の世代であり、テイラーもその1人であった。このグループは、1957年春、前に述べたように、*ULR* 誌を発行するところの *ULR* 誌グループである³⁰⁾。

以下では、*NR* 誌グループについて敷衍しておきたい。*NR* 誌グループは、マルクス主義の理論を本格的に消化した少壮知識人から成り、年齢も *ULR* 誌グループよりやや高い。彼らはスターリン批判以後の問題を討論する機関として、前年の1956年夏、党内で『リーズナー』*Reasoner* 誌を創刊した。しかし、共産党中央が3号でこの雑誌の停刊を命じたので、彼らは離党して57年秋に *NR* 誌を創設した³¹⁾。

このグループの特徴は、*NR* 誌の創刊号におけるトムスの文章から見て取ることができる。トムスは、本誌が「いかなる政治的組織にも責任を負わないこと、そして宣伝の推進を助けるつもりはないこと」を宣言する。しかし彼は「イギリスにおけるマルクス主義者とコミュニストの伝統を性急に破壊したいわけではない」という。トムスは、この伝統を「再発見および再肯定」する必要があると考え、この伝統を、ウィリアム・モリス William Morris やトム・マン Tom Mann のような人びとに基礎づけている。さらに、この伝統を支えてきた「労働運動のエネルギー」が、「ソーシャリストの知識人と、実践的な運動をする人びとの間の関係が断ち切られることによって、弱められてきた」と考えた。トムスは、*NR* 誌が、労働運動と知識人の関係を再び確立して、これらのエネルギーを再び生み出すことを期待していた³²⁾。

30) Stuart Hall, "The 'First' New Left: Life and Times", p.15; Stuart Hall, "Life and Times of The First New Left", pp.178-179.

31) 福田歓一「解説——あとがきに代えて」E.P. トムソン編／福田歓一・河合秀和・前田康博訳『新しい左翼——政治的無関心からの脱出』岩波書店、1963年、361頁。テイラーは、*NR* 誌グループに属していたわけではないが、*NR* 誌に何度か寄稿しており、本誌の中で *NR* 誌の中心人物であるトムソンと対話している。テイラーより年長であったトムソンは、当時のイギリスでは有力な影響力をもつニューレフトの指導者の1人であった。

32) E. P. Thompson, "Editorial", *The New Reasoner*, Summer 1957, number 1. この雑誌はオックスフォードに始まって急速に広い知識人読者層を獲得していった。この雑誌は、「伝統的労働運動の内外において非常に広く普及しているムードに政治的表現を与え」、「古い官僚制的組織に警告を与える仕方若者たちの不満やニーズに対して表現を与え」、「批判的な戦後世代の真の声」を代表していた (E. P. Thompson, "The New Left", *The New Reasoner*, Summer 1959, number 9, p.11.)。創刊号の論説は「守備範囲を広くとったうえで社会主義の理念を提供し政治活動を行う」ことを告げている。この雑誌は「いかなる政治的な方針」

論 説

第3に、2つのグループの差異と共通点についてであるが、デニス・ドゥオーキン Dennis Dworkin によれば、どちらのグループも、ソーシャリスト・ヒューマンイズムの立場を提唱していた。両グループは、お互いが共通の闘争に関与していると考えたが、彼らは、年齢における違い、政治的経験における違い、そして理論的志向における違いの結果として意見を異にした。NR 誌の活動家たちは ULR 誌グループが労働運動との現実的な紐帯を欠いていることを軽蔑し、前衛的芸術家たちに彼らが熱心であることを軽蔑し、流行しているものに彼らが惹かれることを軽蔑した。例えばトムスンは、ULR 誌グループが、気取った自己孤立的な態度に屈するであろうと考え、そうした態度は、日和見主義者で俗物的な態度と同じように、ソーシャリストの運動において腐食していくであろうと考えた。

他方で、ULR 誌グループは、NR 誌グループが、政治的に狭く知的には時代遅れであると考える傾向があった。実際に、レイモンド・ウィリアムズは、世代的には NR 誌グループに属していても、知的には ULR 誌グループに近かったが、彼は NR 誌が、共産党系マルクス主義者 (the Party Marxist) との不毛な戦いに関わりすぎていると考えていた³³⁾。

このように、ニューレフトの2つのグループは、政治的、理論的傾向を異にしていた。それにもかかわらず、両者は1959年12月に合同し、新たに『ニューレフト・レビュー』*New Left Review* (以下、NLR 誌と略記)を隔月刊で出発させた。さらに両者は、1958年1月に発足した「非核武装運動」(CND)をはじめ現代イギリスの実践的課題と取りくむことになる³⁴⁾。

政治的、理論的傾向が異なる2つのグループが合同することができたのは、両者が次のような共通点をもっていたからである。彼らは、自らを、コミュニストと労働党右派の経済主義に対する代替案と考えていた。また彼らは、文化と芸術に特別な地位を与えた。文化的な組織と制

も持ちえないことを強調する。というのは、この雑誌は「社会主義のさまざまな異なる豊かな伝統が、開かれた議論の中で自由に出あうことを求める」からであるとされている (Charles Taylor et al., "Editorial", *Universities & Left Review*, Spring 1957, Vol.1 No.1, p. ii)。

33) Dennis Dworkin, *op.cit.*, p.62.

34) 福田歓一、前掲論文、361頁。

度は、人々の生活においてますます重要な役割を果たしていると考えたからである。ニューレフトは、多様でインフォーマルな政治運動であり、CNDの参加者、労働組合と労働党左派の経験豊富な人、ラディカルな専門家、反文化的学生、芸術家、異議のある共産主義者 (dissident Communists)、を含んでいた³⁵⁾。

第4に、これまで述べてきたように、テイラーはニューレフト運動に積極的に関わっていたが、*NLR* 誌が創刊された後の1961年に、彼はカナダへ帰国する。これ以降、もちろん彼のニューレフト時代の精神は継承されるのだが、彼の関心は、もっぱらカナダの新民主党の活動に移行する³⁶⁾。彼の帰国については、*NLR* 誌において、以下のように記されている。

残念なことに、チャック・テイラーは・・・カナダに帰るのであるが、知的かつ政治的に良質なものを持ち帰り、私たちはその代わりを見つけることは難しいだろう。・・・モカシン [革靴の一種] を履いて6フィート7インチ [200.66cm] の身長だったチャックは、私たちの意見の違いを解決し、50分の講義を一気に話して5分に詰め込んだように非常に素早く、疎外とアノミーについての話をし、編集委員会を驚かせたものだった。彼はカナダ政府によって、電子頭脳の代わりに雇われたと噂されている。委員会だけでなく、読者も、チャックとアルバ Alba [テイラーの最初の妻であり、若くして亡くなっている] の幸運を祈っているし、新たなカナダの政党とうまくいくよう祈っている³⁷⁾。

テイラーがカナダに帰国した時期は、ニューレフトが大きく世代交代

35) Dennis Dworkin, *op.cit.*, p.61.

36) ニコラス・スミスによれば、テイラーはカナダに帰国した後も、「ニューレフトの政治への彼の関与は、決して終わったわけではなかった」(Nicholas H. Smith, *op.cit.*, p.183.)。高田宏史も述べるように、カナダでのNDP (新民主党) におけるテイラーの政治活動は、「オックスフォード時代以来のテイラーの課題であった『社会主義の取り戻し』を現実化していく過程」であった(高田宏史、前掲論文、207頁)。

37) Charles Taylor et.al., "Editorials-Notes for Readers", *New Left Review* 1/12, November-December 1961.

をする時期と重なっていた。トムスンによれば、1960年代には、ペリー・アンダースン Perry Anderson をはじめとする「第2期のニューレフト」の時代に移行する。第2期ニューレフトにおいては、表現活動が、合理的でオープンな政治活動よりも重んじられるようになり、同時に「ソフィステケートされたマルクス主義理論」が発展した。トムスは、第2期ニューレフトの理論は「ますますソフィステケートされた神学」³⁸⁾のようになり、それゆえ、トムスは、自らの関与していたマルクス主義の伝統と訣別するもののように思い、この雑誌からも遠ざかるのである。

(3) テイラーの核廃絶運動

テイラーの運動は、核兵器に対する懸念を含んでいた。1950年代当時、世界的に、核兵器に対する懸念が広まっていた。核兵器は、人類全体を滅亡させる究極の疎外を引き起こす危険があると理解された。そのため、テイラーは、核兵器廃絶運動にも積極的に関与したのである。

テイラーは、ハンガリー難民支援やニューレフトの運動を行うよりも前から、核兵器反対の運動を行っていた。彼は、すでにオックスフォード大学の学部学生であった1954年に、水素爆弾禁止を求める最初の活動を開始している。アメリカによる最初の水素爆弾実験が、1954年1月に、マーシャル諸島にあるビキニ環礁で行われた。これは国際的な懸念を引き起こすと同時に、日本の第五福竜丸事件を引き起こした³⁹⁾。

テイラーは、これに強く反発して、オックスフォード大学で反核の運動を開始した。この内容が1954年5月3日のロンドンのタイムズ *The Times* で、次のような記事として報道されている。

38) E. P. Thompson, "E. P. Thompson", in Henry Abelove, Betsy Blackmar, Peter Dimock, and Jonathan Schneer (eds.), *Visions of History*, Manchester University Press, 1983, p.10; 近藤和彦・野村達朗編訳『歴史家たち』名古屋大学出版会、1990年、65頁。

39) S. Wittner, *The Struggle Against the Bomb Volume Two: Resisting The Bomb—A History of the World Nuclear Movement 1954-1970*, Stanford University Press, 1997, pp.1-2. S. Wittnerによれば、広島を破壊した爆弾の何千倍もの力をもった武器である「水素爆弾」(hydrogen bomb)の開発が、1954年から急速に発展した。とりわけ、同年1月に行われた水素爆弾実験を契機として、人類が大災害の危機に瀕しているという考えが活発になり始めた。

水素爆弾の禁止を支持するという大学の意見をまとめるという目的をもった運動が、昨夜、オックスフォードで始まった。約 40 人の大学のメンバーが、ベイリオル (Balliol) カレッジに集まり、ベイリオルの学部生であるチャールズ・テイラー氏の議長の下で、請願書が「形作られ」執行委員会が形成された。・・・請願書は、爆弾の禁止を要求している。なぜなら「爆弾は道徳的に間違っているから」であり、爆弾の禁止について合意することが「東西の緊張を緩和するだろうし、総合的な軍縮に向けた実践的な最初の一步になりうるであろう」からである。「国際政治におけるイギリスの重要な地位」という視点において、請願書は、イギリス政府に対して、コントロールと査察のための効果的な仕組みとともに、国際的な合意による爆弾の禁止を提案するよう、要求している⁴⁰⁾。

テイラーは、イギリス政府に対して、爆弾を即時かつ単独で一方向的に禁止するよう要求する請願書を作った。この文書には、爆弾を禁止することで東西の緊張緩和をもたらし、軍縮に進むべきであるという彼の思いが書かれており、それは大学中に配られたという⁴¹⁾。

1 週間後であるが、この請願書は、オックスフォード大学の学生の諸組織の代表者 65 人の間で、白熱した議論のテーマとなった。そこで右派の学生組織である「ブルー・リボン・クラブ」の代表者によって修正提案が行われ、これが可決された。ブルー・リボン・クラブの代表は、テイラーのもともとの請願書が「共産党員のおいがする」ものとして取り扱われるだろうという理由に基づいて、テイラーの請願書を一部修正したという。ブルー・リボン・クラブの代表は、マイケル・ヘゼルタイン Michael Heseltine である。なおヘゼルタインは、1980 年代の保守党政府の大臣になる人物である⁴²⁾。

こうしてテイラーとヘゼルタインの手を経た請願書は 1954 年 6 月 21 日に議会に提出された。1954 年 6 月 22 日のタイムズには、次のような記事が掲載されている。

40) *The Times*, May 3, 1954, "Oxford Petition against Hydrogen Bomb".

41) Nicholas H. Smith, *op.cit.*, p.12.

42) *Ibid.*, p.13; *The Times*, May 8, 1954, "Oxford Petition for Disarmament".

6月21日水曜日、議長は、2時半に着席。オックスフォード選出のロレンス・ターナー Lawrence Turner 議員が、オックスフォード大学の学生 1140 人によって署名された請願書を提出した。その請願書は、政府が、効果的な国際的監視と査察を通じて、水素爆弾とその他の大量破壊兵器の廃止を含めた、軍縮を確実に行うようさらに精力的に努力するよう求めている⁴³⁾。

この記事からもわかるように、テイラーの指導で開始された核兵器反対運動は、オックスフォードの保守的な学生もまきこんで、国会に請願を提出するまでになったのである。前に述べたビキニ環礁での核実験の後、労働党は、保守党政府が、核実験を中止させるような首脳会談を開くことを国際社会に強く要求することを求める国会の決議案を持ち込んでいた。こうした労働党の動きと、テイラーらの開始した反核運動は、方向性を同じくしていたと言える⁴⁴⁾。

テイラーは、オックスフォードの大学院に進学してのち、労働党に入り「核廃絶運動」(CND)にも参加している⁴⁵⁾。彼は1957年には「オックスフォード大学の非核武装運動の最初の代表」(the first president of the Oxford University Campaign for Nuclear)になっている⁴⁶⁾。勝部元によれば、このCNDは、「著名な哲学者ラッセル卿、英国国教会のキャノン・ジョン・コリンズ、小説家T・B・プリーストリー、K・マーチンら社会的名士が中心となり、1958年1月に・・・結成」された⁴⁷⁾。CNDの最初で最も成功した年月において、テイラーを代表とするオックスフォード大学の非核武装運動は、組織のとりわけ効果的な支部であったという。当

43) *The Times*, June 22, 1954.

44) S. Wittner, *op.cit.*, p.16.

45) Mark Redhead, *Charles Taylor: Thinking and Living Deep Diversity*, Rowman & Littlefield Publishers INC., 2002, p.46. マーク・レッドヘッドのインタビューに対して、テイラーは次のように述べている。「オックスフォードで私は、ニューレフト・レビューの創設、核廃絶運動のような様々な事柄に関与しました。私は労働党に入りました。なぜなら当時、カナダ人はイギリスの政治に参加することができたからです。」

46) Christopher Driver, *The Disarmers: A Study in Protest*, Hodder and Stoughton, 1964, p.74.

47) 勝部元「英国における新左翼と平和運動(上):目撃者の記録とその歴史」『エコノミスト』第40年・第35号、1962年、50頁。

時イギリスに滞在していた勝部元は、1958年、すなわちテイラーがニューレフトで活躍しているとき、CNDに積極的に関与しているテイラーを目撃している。勝部によれば、「58年2月17日、CNDは5000人の聴衆を集め、ラッセル、コリンズ、プリーストリー、ホール、テイラー、それに労働党代議士で希代の雄弁家マイケル・フットらが大衆に呼びかけ、58年イースターには5000人を動員したオールダーマストーン大行進が組織された」という⁴⁸⁾。また、G.E.M. アンスコム G.E.M. Anscombeも、「チャック・テイラーは、労働党のヒュー・ゲイツケル Hugh Gaitskell に対抗する CND 運動のリーダーの1人であった」と述べている⁴⁹⁾。

このようにテイラーは、核兵器廃絶運動に積極的に参加しながら、*ULR* 誌の創設において主導的役割を果たした。こうした実践的運動に関わる中で、テイラーはどのような理論的立場を形成していったのだろうか。とりわけ、*ULR* 誌において、「疎外」や「初期マルクス」、「ソシャリズム」についてどのように考えたのか。この点について、次節で述べる。

第2節 テイラーと初期マルクス

ニューレフトの時期のテイラーは、疎外に強い関心を持ち、マルクスの『経哲草稿』の影響もうけて、疎外概念を作り上げていく。そこで、第1に、彼の疎外についての最初の理解について、第2に、マルクスからの影響について、述べることにする。

(1) 疎外

テイラーは、自らの思想がアレクシ・ド・トクヴィル Alexis de Tocqueville の思想に強い影響を受けていると度々言及してきた。田中智彦もまた、テイラーが75年に大著 *Hegel* を公刊して以後、彼は次第に「Tocquevillean (トクヴィル主義者) としての姿勢を鮮明にしてゆく」

48) 勝部元、同上論文。

49) G.E.M. Anscombe, "Mechanism and Ideology", *New Statesman*, 5 February 1965, p.206.

と述べている⁵⁰⁾。テイラーは、「トクヴィル主義者」として、「穏やかな専制」に危惧を抱き、「権力の分散」とそれによる「民主的な当事者能力の付与」を提唱するとされる。

テイラーの長年の友人であったロバート・ベラー Robert N. Bellah もまた、テイラーが「真の自律的市民 (a genuinely autonomous citizenry) の問題に関心を持ち続け、その点に関してトクヴィルの多くの警告を肝に銘じてきた (has taken to heart Tocqueville's many warnings)」⁵¹⁾と論じている。ベラーによれば、トクヴィルは 1830 年代に次のように警告した。「もしアメリカ人が自由を失うのであれば、産業の新たな支配者の力が増加することが原因であろう」と⁵²⁾。トクヴィル自身、「産業の危機」について指摘しており、これは「現代民主国家における 1 つの疫病 (une maladie endémique) だ」⁵³⁾とまで言い、これによる労働者の疎外について警告している。彼は、「雇用者は日ごとに、より大きく全体に眼を配り、その精神は」「拡大する」一方であるが、労働者は「一般的能力を失う」と言い、雇用者は「巨大帝国の管理者に」なり、労働者は「獣に似てくる」とまで述べている⁵⁴⁾。ここで使われている「より大きく全体に眼を配」ることは、単に生産工程の問題にとどまらず、その企業をとりまく社会や政治に「より大きく」関心を持つことを含んでいる。ベラーは、テイラーがこのようなトクヴィルの警告を真剣に受け止めていたことに注意を促したのである。

50) 田中智彦「訳者あとがき」チャールズ・テイラー著／田中智彦訳『〈ほんもの〉という倫理——近代とその不安』、167 頁。

51) Robert N. Bellah, "Confronting Modernity: Maruyama Masao, Jürgen Habermas, and Charles Taylor" in Michael Warner, Jonathan VanAntwerpen, and Craig Calhoun (eds.), *Varieties of Secularism in a Secular Age*, Harvard University Press, 2010, pp.42-43. テイラー自身も、自己を「トクヴィリアン」(Tocquevillean) であると言い、彼の「考えでは、市民的自己統治の健全さ (the health of citizen self-rule)」の再建が重要であると論じている (Charles Taylor, "Marxism and Socialist Humanism" in Robin Archer, Diemut Bubeck, Hanjo Glock, Lesley Jacobs, Seth Moglen, Adam Steinhouse, Daniel Weinstock (eds), *Out of Apathy: Voices of the New Left Thirty Years On*, Verso, 1989, p.67)。

52) Robert N. Bellah, "Confronting Modernity: Maruyama Masao, Jürgen Habermas, and Charles Taylor", p.38

53) Alexis de Tocqueville, *De La Démocratie en Amérique*, *Librairie Gallimard Tome 1*), introduction par Harold J. Laski, Librairie Gallimard, 1951, p.163; 松本礼二訳『アメリカのデモクラシー・第 2 巻 (上)』岩波書店、2008 年、269-270 頁。

54) *Ibid.*, p.165; 松本礼二訳、271 頁。

本稿にとって重要なことは、こうしたトクヴィル主義者としてのテイラーの側面は、彼が青年のころの著作にも発見することができる、ということである。テイラーは、1958年の論文「疎外とコミュニティ」(Alienation and Community)で、トクヴィルを引用しているわけではないが、このトクヴィルの「より大きく」関心を持つ、という意味と類似した用語として「大きな全体」(a larger whole)という言葉を使っているのである。テイラーは、この「大きな全体」における「共通の意味」(common meanings)や「社会的絆」(social bonds)の理解こそが、人間にとって必要なものだと言う⁵⁵⁾。

テイラーの「社会的絆」は、非常に包括的なものである。なぜならそれは、経済や政治のみならず、宗教、文化、規範、人間的絆、なども含んでいるからである。しかも、このような絆は、人間活動を支える価値的な基盤であるともされる。テイラーによれば、この基盤がなければ、人間の健全な活動は行われぬ。そこで彼はこの基盤に支えられた人間の活動を、以下に述べるように、「人間活動のより高次の形態」として⁵⁶⁾。

それ〔社会的絆 (social bonds) が弱くなるということ〕は、人間活動のより高次の形態 (the superior forms of human activity) の意味を破壊する。・・・人がそれ〔社会規範〕に従った理由は、・・・人が高度な大きな全体 (a larger whole) に属し、その一部であると思うことができたからである⁵⁷⁾。

テイラーは、この「大きな全体」こそが、人間活動にその「意味」(meaning)を与えるという。しかも「大きな全体」は、多くの人びとに共有されるものであり、人々は、その共有を通じて、「共通の意味」を分け合う⁵⁸⁾。しかしながら、人々の「共通の意味」が解体し、「社会的絆」が崩壊し、人々がアノミーの中に置かれるなら、人々は生活の意味を失

55) Charles Taylor, "Alienation and Community", *Universities & Left Review*, 5, Autumn 1958, p.15. (以下 AC と略記する。)

56) AC, p.15.

57) AC, p.15.

58) AC, p.15.

う。このような意味喪失をテイラーは「疎外」と呼んだのである。

(2) 初期マルクス

テイラーは、人々を覆っている疎外状況の克服が必要であると言う。そのためには、初期マルクスの疎外概念が役にたつものであった。すなわち、初期マルクスの疎外概念こそ、疎外克服の方法をも示すものと考えられたのである。

テイラーによれば、マルクスは、19世紀の産業の発展が、前近代の狭い共同体としての閉じられた社会を終焉させ、人々を混沌とした状態に追い込むと考えたが、この混沌は、人間が、産業社会の段階で、自然を支配しようとする闘いの副産物であった⁵⁹⁾。その闘いの中で、すなわち産業社会を進展させるなかで、人間社会は巨大な「創造的力」(creative power)を進展させたが⁶⁰⁾、その力を構成する諸個人は、もはやその産業社会の力をコントロールすることができなくなる。産業社会の力は、人間にとって「外的な力」(alien power)になってしまうからである⁶¹⁾。

たとえば産業社会段階以前では、職人は自己の生産物について、その設計から完成まで、自ら理解して自己管理することができた。しかし巨大な産業社会の登場によって、人は、命令された労働をするだけになり、全体について考えることも理解することもコントロールすることもできなくなる。まさに産業社会は、人に対して外的な力として現れてくるのである。その疎外についてテイラーは、マルクスを引用しながら述べている。

マルクスにとって、人間の創造的力のモデルは産業 (industry)、つまり生産であった。しかし少なくとも彼の疎外に関する理論では、彼は彼自身の関心を狭い意味での生産 (production) には限定しなかった。彼は疎外の根源を労働の疎外 (alienation of work) に求めた。人間の歴史の悲劇は、自然的環境によって課された諸条件から人間

59) AC, p.17.

60) AC, p.17.

61) AC, p.17.

の労働が自由になったまさにその瞬間に、それ〔人間の労働〕が、彼にとって疎外的 (alien) になり、彼自身のコントロールの外部にある力になることにある。しかしマルクスは、労働が、創造に関する、人の巨大な諸力の表出であると考えたから、彼は労働の疎外が人間の全体的な創造的活動 (creative activity) の疎外をもたらすと考えた⁶²⁾。

テイラーも、「本来『労働』とは、生活の重要な一部であり、その生活は彼が受け入れることのできる『意味』を持っていなければならない」⁶³⁾と述べる。しかし労働疎外は、意味のある人間活動としての労働を破壊する。産業社会において、もはや生産は人間にとって意味のある活動として認識されなくなり、その結果、人間のニーズは、以下のように歪められるとテイラーは言う。

産業社会においては、人間のニーズ (needs) は、所有のニーズ、つまり受動的に消費できるものを持つニーズへと変換される傾向にある。しかしこれは人間のニーズの歪みである⁶⁴⁾。

このようにテイラーは、産業社会において、本来なら生産を中心とする創造的活動で満たされるはずの人間のニーズは、受動的消費のニーズに墮落させられ、人間の喜びも「消費」の一形態へと抑え込まれ、歪められるという。ここで使われている「ニーズ」という用語は、マルクスから来たものであり、『経哲草稿』を引用しながら次のように述べる。

人間は新たなニーズを獲得することによって、そして自己の自然的ニーズを超えたところに行って芸術、音楽、文学における他のニーズを発見することによって、自己を豊かにする⁶⁵⁾。

62) AC, p.17.

63) AC, p.17.

64) AC, p.17.

65) AC, p.17.

論 説

このテイラーの引用するマルクスの「新たなニーズ」は、次の『経哲草稿』の引用が示すように、資本主義においては満たされず、社会主義によって実現されることになるニーズのことである。

もし社会主義であるなら、人間の豊かなニーズ (human needs) がいかに重要なものになるか、を見てきた。だから、新しい生産様式と新しい生産の目的が、いかに重要になるか、を見てきた。人間の本来の力と、それを豊かにすることが、新たに宣言される⁶⁶⁾。

もし社会主義であるなら実現するであろう「ニーズ」の中に、テイラーは、人間の家庭での生活や芸術活動や隣人との活動や宗教活動などの全般を含む。ここで、人間は創造的な喜びを見出すはずだとしている。しかし、現代の産業社会では、疎外された労働に従事させられる人間においては「創造的」な喜びは、原則的に、満たすことが不可能になる。喜びは、人を「地位 (status) や業績 (achievement) といった一連の空虚な諸シンボルへと鎖でつなげる」⁶⁷⁾ こととしてのみ、見出されるものとなってしてしまうのである。

このように、テイラーは人間が創造的な活動から疎外されていると考えた。テイラーにおいて、この疎外は、消費によって克服することは困難なものである。人間は、自らが生産した商品を、貨幣によって購入し、自己の創造性を買い戻すことができるかのように思っている。商品の購入や所有や消費は、労働者の創造性の奪回であるかのように感じられる。社会的地位や業績も、貨幣によって購入できるかのように思われている。しかしテイラーは、再びマルクスの『経哲草稿』を引用しながら、人が貨幣によって買い戻すことができるのは、「見せかけの創造性」(sham creativity) でしかないと言う⁶⁸⁾。なぜなら「積極的な応答や参加を必要とする」独創性、例えば労働や、その高度な業績である芸術や、共通善

66) Karl Marx, *Economic and Philosophic Manuscripts of 1844*, Translated by Martin Milligan, Prometheus Books, 1988, p.115; 城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波書店、2009、149頁。ただし訳文は一部変更している。特に、城塚他訳では「ニーズ」ではなく「欲求」と訳されているが、本論文では、文脈の必要上「ニーズ」と訳する。

67) AC, p.17.

68) AC, p.17.

のような意味のある諸関係は「消費」されえないし、ましてや「所有され得ない」からである。

以上が、テイラーが見た疎外の現状である。これを克服するために、人は、食生活などの最低限の自然的ニーズを超えて、さらに高度なニーズを満たさなければならない、とテイラーは言う。その高度なニーズを満たすために、マルクスは生産手段の「集団的領有」(the collective appropriation) を考えたという⁶⁹⁾。しかしテイラーは、スターリニズムをはじめとする当時の共産主義には否定的であったので、これをもたらした生産手段の「集団的領有」については否定的である。実際彼は、当時の世界の諸共産党が行っていた資本や土地などの国有化や公有化などは拒否している。

それにもかかわらず、テイラーはなおも初期マルクスから受け継がなければならないものがあると主張する。それは、以下のような民主化についての導きの糸である。

私たちがマルクスから受け継がなければならないものは、民主化についての導きの糸 (the guiding thread of democratization) である。ソーシャリストの政策の基本原則、すなわち、ワーカーズ・コントロール (workers' control)、教育における真の平等、マスメディアに対する社会的コントロール、これらはすべて自己の生活を形成する集合的諸力に対する個人の力の拡大を含むのであり、共通の目的 (common purpose) についての感覚を形成することを含む⁷⁰⁾。

テイラーは、上のような基本原則を継承したいという。たとえ「集団的領有」の概念には問題があっても、ワーカーズ・コントロール、教育の平等、マスメディアに対する社会的コントロールは、ソーシャリストの基本原則として、なおも擁護するにふさわしいものと考えられているのである。とりわけ最初のワーカーズ・コントロールは、企業の経営者が持っていた経営権を労働者が掌握して、労働者にとってより良い企業に変えていこうとする思想である。企業の中における経営者と労働者の

69) AC, p.17.

70) AC, p.17.

対立を、労働者による指導によって解決し、一方的に働かされる労働疎外を克服しようとする試みであった。

しかし、現代社会でマルクスという名前で連想されるものの1つは社会主義革命であろう。これは資本主義社会を廃止して社会主義社会を形成するものなので、資本家階級と労働者階級との階級闘争を基本とする。資本主義的な企業形態も廃止される。しかし、スターリニズムに対する激しい批判から出発したテイラーが、マルクスから読み取ったことは、社会主義社会の実現ではなく、資本主義社会において、その生産のありかたまでもふくめて、民主主義化することであった。

当時のソビエトを初めとする社会主義国の方式でのソーシャリズムは、テイラーの念頭にはなかった⁷¹⁾。彼は、生産の現場におけるデモクラシーをはじめ、教育やメディアなどに対する「社会的コントロール」による「民主化」が必要だとしている。したがって、テイラーのソーシャリズムは、私有財産制を残したうえで、政治のみならず、経済や、企業の内部や、地域社会や、教育などの全ての領域に「民主化」(democratization)をもたらしことであると考えられている。

前に述べた生産手段の「集団的領有」による社会主義社会の形成については、テイラーは否定的であった。たしかに「集団的領有」は資本主義企業の基礎となる私的所有権を廃止するので、資本主義による疎外を克服する基礎になるとも考えられる。しかし、ハンガリー難民支援から政治活動を始めたテイラーにとって、その代わりに登場する社会主義社会の問題性の方が大きなものと理解されたようである。社会主義は共産党の支配をもたらし、最終的にはスターリニズムになると考えられた。

71) テイラーは、レーニンの方程式を引用すれば、「ソーシャリズム=ソビエト権力+産業化」(Socialism = Soviet power + electrification)であったと述べる。このソビエト的な「ソーシャリズム」は近代化のイデオロギーと密接に結びついていた。しかし、西洋においては、ソーシャリズムは、一枚岩的な運動ではなかったものであり、両義的であった。テイラーによれば、実際、近代のソーシャリズムは、2つのものを組み合わせようとする試みとして始まっている。1つは、近代化への原動力である。もう1つは、「資本主義社会に対する表現主義的な批判」(the expressivist critique of capitalist society)である。このようにソーシャリズムには、「スペクトラム」が存在している。テイラーは、ウィリアム・モリス William Morris を、「表現主義的」な極に位置づけており、彼自身もこの極に近いと思われる (Charles Taylor, "Socialism and Weltanschauung" in Leszek Kolakowski and Stuart Hampshire (eds), *The Socialist Idea: A Reappraisal*, Weidenfeld and Nicolson, 1974, pp.45-58)。

テイラーは共産党の支配する社会主義社会の実現ではないソーシャリズムとして、政治や経済や社会の全体的な民主主義を実現しようとしたのである。

さらに、前にテイラーから引用した文にあるように、彼は「自己の生活を形成する集会的諸力に対する個人の力の拡大」をしようとしており、それを通じて市民の「共通の目的についての感覚を形成する」ことが必要だと考えた。市民が、自己の力を拡大する中で、相互の理解を深め、共通の社会的な目的を発見していくことを期待している。以上述べたことから、テイラーのソーシャリズムは下記のように整理することができると思われる。

- [1] 現代資本主義社会（産業社会と呼ばれることもあるが）における疎外を克服しなければならないこと。その疎外克服の方法として、社会や経済の全般における民主化を行うこと。
- [2] 疎外克服によって、市民が共有できる意味と社会的絆を構築すること。

これは当時のソビエト社会主義などとは非常に違うイメージではあるが、彼はこれをソーシャリズムと呼んでいる。

